
神仰無々録

鈴原蒼

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

神仰無々録

【Nコード】

N0243Y

【作者名】

鈴原蒼

【あらすじ】

神と誤解された巫女。そして唯一の理解者であった友の娘。

神殺しが人間達の間で流行する中、巫女に託された願い。

その願いは果てしなく遠く

初投稿の作品です。誤字脱字

が多いと思います。

序章 月夜の巫女

鏡花水月。鏡に映る花も、水面に浮かぶ月も手に取る事はできない。

それと同じように私の事を殺そうとしている幼女のナイフの刃は決して届かないだろう。

私を殺す事を目的とした人間は神殺しと呼ばれている。神への信仰を忘れ、欲に目がくらんだ残酷極まりない下克上。神を殺す事でその殺した人間が神になれると誤解した人間達は愚かにも老若男女が先を競って私を殺そうとしている。

しかしそれだけではない。その土地の神も知らない人間は私の事を神だと勘違いし、ただの巫女を神の位にまで人々の想像は押し上げた。

この地で巫女をやっている私は人付き合いが少なく育ったせい、社から出たときにその姿を見られ神と誤解された。神殺しの最盛期と呼ばれた当時は下級妖怪、使い魔といった人間の生活とは無縁の者達も神として殺されていったらしい。

しかし、その殺すべき対象の神も存在する。神というのはその土地を生き永らえさせるためだけの存在であり、人間が想像しているような絶対的存在ではない。神を殺したところでその土地が死んで逝く、その程度のことしか神殺しで起こらないだろう。

神が新しく生まれる事は恐らくもう二度と無い。死んだ土地はもうかつての姿には戻れない。人間の愚かな行為は、結果として自分達を滅ばせる道筋なのかもしれない。

そう物思いにふけてしていると草陰に隠れていた幼女がナイフを突き出すようにして私の腹部へ突進してきた。幼女の存在に気が付いていた私は、ナイフが腹部に刺さる直前に幼女の手を掴み、幼女からナイフを取り上げる。

今にも噛みつきそうな幼女の顔に対し、私は感情のこもっていない

い顔で接した。

「あなた名前は？」

「・・・」

無言のまま全く喋らない幼女は、ひどく静かに怒っているように見える。初めて会ったのにも関わらず、よく見知った怒りを目にしたような感情になる。

見たことがあるようなその眼は一匹の妖怪によく似ていた。

「もしかして・・・悠魔ゆうまの娘さん？」

「・・・」

無言でありながらも僅かに肩が動く。凶星のようだ。

幼女は相変わらず押し黙り続ける。

「悠魔か・・・懐かしいわね。昔は悠魔と一緒に」

「だまれっ！！あなたの話なんか聞きたくないっ！私のお父さんはあなたの身代わりになって死んだ！元はと言えばあなたがお父さんを殺したようなものだ！私は遺言すらも聞けなかった！あなたがお父さんを語る資格なんてこれっぽちも無い！！」

まるで唐突にガスが爆発したようだった。これまで不安定な状態で溜め込んできた怒りを全て吐き散らすような。

「あら、それじゃあ教えてあげる。悠魔の最後の言葉を・・・」

美しい満月のこの日、私は全てをはき散らし疲労した幼女に友の言葉を託した。

私の願いと同時に・・・

第一章 夕焼けの翼

思えばかなり長い月日が流れただろう。

あの日私は真実を知った。その真実は私の想像を遙かに超えていた。

私は今父の後を継ぎ、辻斬りとして各地を旅しているが私の旅の理由はそれだけではなかった。

復讐。あの日あの巫女に教わった本当の父の仇。何者かに月夜の晩殺され死体は巫女の神社の目の前に置かれていたという。

あの巫女はその時何を思い、なにを感じたのだろう。自分の知人が殺され、目の前にその死体が置かれていたら。

冷たい月夜に二度と動かない体、それは私もかつて見たことがある光景だった。私はその日から心を閉ざした記憶がある。誰とも付き合うこともせず、毎晩静かに涙を流すのみ。今から思えば死体のような生き方をしていた。

しかし過去があるから未来もある。自分の歩んだ過去を認め未来へ繋げなければいけない。それを私は巫女から知った。復讐は過去の不始末をはらす為。必ず成功させなければならぬ。

夕日に照らされ顔が水面に紅く映る逢魔時。古くからこの時間帯に魔が出ると言われているが、私にとって逢魔時は最も動きやすい時間帯だった。

妖怪である私は背中に羽が生えているので神殺しが流行っている今、昼間を堂々と歩くことができない。もしこんな格好をしているのが見られたら間違いなく人は襲ってくるだろう。

「さて・・・と」

細い川の土手に埋まっている桜の木の上にいる私は立ち上がると漆黒の翼を開いた。羽の数枚かが抜け落ちるが鳥の羽と見た目は変わらない。小さい羽の集まりであるこの《漆喰》は我らが悠闇一族にしか生えない特別な羽だ。時を積めば積むほど固くそしてしなや

かになっていく。

私は《漆喰》を水平にし、飛行体型にする。軽く翼を打つとそのまま脚力で桜の木の枝から細い川まで飛び降り、風に乗って水面ぎりぎりのところを飛行した。

夕日が川の水に反射してとても眩しい。私は目を閉じると《漆喰》に当たる冷たい風を感じながら方向を確認する。

目的地は西の岬。ここからさほど遠くない。目的はある人物に会うことだった。

復讐の助力者。それは神と言われた炎神《ほむらがみ》だった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0243y/>

神仰無々録

2011年11月5日15時03分発行